

平成13年3月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土資料室

(青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859)

## 春3月の金魚売り

「キンギョー キンギョー メダカー キンギョー」

橋本文次郎さんの金魚売りの声が聞こえてきます。戦後、金魚商でもあった父の指導で金魚商となり、ふだんは師岡町で金魚店を営んでいますが、1年のうち、3月の天気の良い日だけ、金魚売りに出かけます。青梅あたりでは、昔から3月の節供に、お雛様と一緒に金魚も飾ることになっていて、年寄りの家では待っているからです。昔はもっと遠方にも出かけましたが、最近てっこうは小曾木、飯能、名栗、秩父へ出かけています。頭に富士傘をかぶり、手甲、腹掛、法被はらがけを身に着け、脚絆きやはん、地下足袋という出で立ちです。天秤棒の両端に木桶をかけて、かつぎます。三重のいれこになった木桶、竹籠、7種類程度の金魚を入れた容器、えさなど、役40キログラムの重さが肩にかかります。売り歩いて夕方になると、バス停そばの馴染みの家に荷を預け、バスで自宅に帰り、次の金魚をバスで運ぶ方法で、小曾木、飯能、名栗へは片道3日位かけ、秩父へは電車で7日位かけて行きます。帰りは違う道を売り歩くようにします。金魚は、歩いて運ぶのが一番良いのです。かついで歩くと、金魚が水にすいついて動くから痛まないのですが、リヤカーや車だと振動でお互いにこすれて、裸になって死ぬこともあるのです。また、水も大事で、青梅の水は良いのですが、遠くへ行く時は、水の浄化材を持っていきます。昔は大宮に中武蔵組合があり、青梅付近で20人位加入していました。今では、金魚売りは青梅市内でも、都内でも、橋本さん一人になってしまいました。全国的に見ても、他に一人続けているかどうかという状況だそうです。(平成7年 橋本さん談) その橋本さんも76歳になって、平成10年3月で金魚売りは終わりにしてしまいました。後継者はいません。

ところで、現在一般的に金魚売りは、涼をよぶ夏のものと思われています。俳句の季語でも夏になっています。しかし、青梅では、昭和40年代の調査で、他地区(今井、河辺、古武士)でも金魚売は春の節供前だけ、あるいは3月に来るので、人々は金魚売りの声を聞くと、「3月の節供が近いなー」、「春が来たなー」と言ったと記録されています。(青梅市の民族、第2分冊) また畑中では、30年代頃、春の節供前だけ魚屋が金魚を仕入れるので、店で買って雛壇に飾ったそうです。なぜ青梅では春の節供前、あるいは3月なのでしょう。疑問に思っていたところ、3月3日が『金魚の日』になっていることが分かりました。江戸時代、雛市で金魚が売られ、雛壇に飾ったことから制定されたのだそうです。金魚は室町時代に中国から渡来しています。雛人形を雛壇に飾るようになったのは、江戸中期からのようです。次第にお雛様と金魚が

結び付いていったのでしょうか。一方、江戸後期（嘉永～慶応）の年中行事と市井の雑事を記録した本「江戸府内絵本風俗往来」では、金魚売りは、初夏～初秋となっています。まだまだ、はっきりしたことは分かりませんが、青梅では江戸の文化が代々引き継がれ、金魚売りの声は、春3月に響くことになったのでしょうか。

（文責 三好 ゆき江）